# 修羅の獄炎　1000年前の英雄

モチみかん

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

１０００年前の英雄が現在に現れたとき、一体なにが起きるのか

# 目次


プロローグ ―― 1
主神 ―― 3
ステイタス ―― 6
ファミリア ―― 9
介抱と誤解 ―― 11

# プロローグ

「……ん？」

世界でただ一つのダンジョンがある街、「迷宮都市オラリオ」。

その都市の組み行った路地裏、で一人の狐人の男が目を覚ました。

その狐人に特にこれと行った特徴は無く、身長は１７０ｃｍ程であり、やや蒼みがかった銀髪で、顔は整っている方であり、赤色に金細工がご施された鞘に入った刀を腰に差し、動きやすい服に体の急所を護る様な軽い鎧を身に着けていた。

そして顔の右側に、何故か狐を模して、揺れ動く炎の様な模様が彫られた仮面を着けていた。

これだけなら、オラリオでオラリオでダンジョンに潜っている冒険者と大差ないし、この狐人もーーーその名前を朧月　焔というーーーも、ダンジョンに潜っている冒険者の一人である。

ただし、焔が思い出せるのは

「……何故俺は此処に居るんだ？」

焔が一番新しい思い出せるのは、確かダンジョンに遠征に行って……

「ああ……そうだったな……俺は……」

焔が一番新しく思い出せるのは……ダンジョンで死んだ記憶だ。

しかし、そう考えると何故今こうして呼吸出来ているのだろう。

明らかに死ぬ様な量の血と、体が冷たくなっていったのに。

上を見ると青空が広がっているため、恐らく地上なのだろう。

……と言うか

「何処だ、此処は」

この男、自慢じゃないがファミリアで一番の方向音痴であるため、基本的に何とかオラリオの地理は頭に叩き込んでいる（それでも迷うのはご愛嬌である）彼であるが、こんな迷路みたいな場所初めてだし、そんな話しを聞いた事もない。

暫く悩んだ末に出た答えは、

「とりあえず、此処から出るか」

行き当たりばったりである。

「本当に何処何だ、此処は」

焔がこの路地裏をさまよって2時間ほど経つが、未だに出口と「で」の字も見えない。

それどころか、どんどん奥へ奥と迷い込まれている気がするし、おんなじ風景だから、今自分が何処に居るのかも分からない。

「一体何処のどんなバカだ、地上にこんなダンジョンの５１階層みたいな場所を作ったのは」

そんな具合いに文句をいいながら進んで行くと、矢印の模様が壁に描いてあった。

「何だ?この矢印」

何の印かは分からないが、何もしないよりはマシと言うことで、矢印に従って歩いて行くと、1時間も立たない内にか路地裏から出ることができた。

……先程の苦労は一体何だったのだろう。

「まぁ、とりあえず此処が何処か確かめｒ」

そう呟きながら右を向くと、ソコには遥か昔に作られ、焔も助力した摩天楼バベルがそびえ建っていた。

「まさか此処は……オラリオか……?」

これは英雄に憧れる白い兎の英雄譚でも、剣姫の強さを求めるソードオラトリオでもない、これは、英雄と呼ばれた、修羅の物語である

# 主神

ひとまず少し歩き周ってい幾つか分かった事が有る。
まず何より、此処が１０００年後の時代だと言うこと、今の最大派閥は、ロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアと言う、２つのファミリアだと言うこと、現在のオラリオ最強は、フレイヤ・ファミリアのレベル７である「猛者」オッタルと言う獣人と言うこと、そして……今のオラリオが、闇派閥と言うファミリアと、その主神によって、「暗黒期」と呼ばれている事。
「さて……とりあえず、主神様の所に挨拶でもしてくるかな」
聞いた所によると、今はギルドという所で、自身の神威を使ってモンスターの進行を防いでいるらしい。

「……なんて輝いているのかしら」
「な～んか……面倒臭いことになりそうやな～」
とある美の女神はその魂の輝きに瞠目し、その魂に天界より見た英雄の姿を見た。
とある道化の女神はその後ろ姿を見、何かが起きるとした確信した。
そして……
「!?」
驚愕に目を見開き、とある老神が勢いよく立ち上がると、そんな神を奇怪な目で眺めるように影の様なフードに全身を覆った者が現れた。
「どうしたんだ？ウラノス。いきなり立ち上がって」
「……私の眷属だ」
「何？」
「このファルナは……私の眷属のものだ」
そんな幾柱の神々の驚愕、緊張、驚きを他所に、焔は自らの主神の場所に急ぐ。
何故、自分がまだ生きているのか、何故、１０００年経った今に自

身が存在しているのか、その疑問を解くために。

「……困ったな」

焔は現在、悩んでいた。

なぜなら、とりあえず「ギルド」という場所には来たものの、肝心の主神に会えないのだ。

というのも、とりあえず出入口に立っていた衛兵らしき人物に、「此処の主神に合わせてくれ」と頼んだものの、追い返えされてしまったからである。

一応強行突破出来なくもないが、出来れば手荒な真似はしたくないし、何よりこの後会う（予定の）主神から直々に叱られる。

そうなると残る手段は……

「どうやって忍び込むか……」

余り気は乗らないが、背に腹は変えられないし、現状はそれしか選択肢がない。

スイが居ればまだ幾分かマシな答えがあっただろうが、とてもじゃないがあんな巫山戯た頭脳と頭の回転を、焔は持っていない。

数分間どうするか色々と考えていたが、特にこれと行った答えもで無いので、歩きながら素直？に潜入方法を思案していた所、

「こちらだ」

「!?」

不意に、今通り過ぎようとしていた路地裏から、暗黒色のローブを全身に羽織った、影の様な男が現れた。

突然のことで、反射的に腰の鞘と刀に手を伸ばす焔だが、そのまま飛びかかる寸前で何とか踏みとどまる。

「……アンタは？」

警戒しながら尋ねる焔に対して、その影は、

「すまない、驚かせる気は無かったんだ。私の名はフェルズ、ウラノスの小間使いだ」

「……」

暫く警戒していた焔だっが、嘘では無いと判断し、刀から手を離す

と、
「で、その小間使いが一体何をしに？」
「ああ、ウラノスから、君を連れてくるようにと言われてね。君を案内しよう。」
　此処まで聞いて、数分間目を閉じていた焔だったが、目を開けると
「案内してくれ」
　そう言った。

「久しいな。焔」
「ああ、主神様もな」
　今此処に、１０００年の英雄とその主神が再び会合した。

# ステイタス

「これは……」

１０００年ぶりに再開を果たした焔とウラノスだったが、今はウラノスによってその背中に刻まれたファルナの更新をしていた。

というのも、焔は先程から少し体の違和感を感じていたのだ。

こう、細かくは言いにくいが、少し体が重い様な、歩く速度が遅い様な、そんな微々たる体の違和感である。

通常であれば対して気にしない様な違和感であり、普通であれば「疲れが溜まったか？」や「体調不良か？」と思う所だが、どうも無視して良い類の違和感に思えなかったのだ。

そして、こういう時の焔の感と言うのは良く当たるのだ。

「どうしたんだ、主神様。まさかレベルでも減ったか？」

とりあえず、それだけではあって欲しくないと言って見たものの、

「……良く分かったな」

「……マジでか」

普段は余り頼りに成らない癖して、こういう時ばかり当たるのは本当に辞めて欲しい。

兎も角、冒険者にとってとしてはレベルが低いと言うのはかなりのハンデとになる。

何しろ、レベルは同じで互角、一つ上で絶望的、２つ上で不可能とまで言われる程だ。

もっとも、レベルが一つ上程度ならば、技量や経験で何とか出来る部分もあるが、相手が自分と同じ、もしくは近い技量を持っていた場合は、勝ち目は無いと言っても良い。

焔自身レベル１や２程度ならば勝利出来る実力はあるが、それ以上となると流石に厳しい。

「それと……。何やら妙なスキルもあるぞ」

「何？」

「見てみろ」

そう言ってウラノスが差し出した紙には、

朧月・焔　　レベル１
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０
俊敏：Ｉ０
魔力：Ｉ０
千年修羅
全盛期の実力になる

「何だ、このスキルは」
「私にも分からん。しかし、このスキルはを使えば元に戻れるのではなか？」
「……」
そう言われ、試しに使えるかどうか試してみたところ、確かに使える。
ならば
「一度試して見るか」
そう呟くと適当な場所にたち、集中力を高めると、
「千年修羅」
呟いた途端に、周囲を尋常では無い威圧感が包んだ。
「くっ」
「ぬう」
うめき声を上げるフェルズとウラノスに慌てて威圧を抑え、もう一度ステイタスの更新をすると、そこに写っていたのは、

朧月・焔　　レベル１２
力：Ｃ６３１
耐久：Ｄ５２９
器用：Ａ８７９
俊敏：Ａ８１１

魔力：Ｄ５０１
修羅Ｓ
耐異常Ｂ
狩人Ａ
精癒Ｆ
魔防Ｆ
剣士Ｂ
指揮Ｇ
鍛冶Ｉ
潜水Ｈ

魔法：火炎魔術　風魔術

スキル

「暴乱火炎」

「憤怒之王」

「……戻ってるな、ステイタス」

「ああ……」

本当に、何なんだ？このスキルは。

「とりあえず、保留だな」

「焔…」

若干楽観的な焔と、頭を抱えるウラノスであった。

# ファミリア

（一体どんな神なのやら）

ウラノスとの再開から数日が経ったある日、この日焔は噴水のある広場のベンチに座っていた。

理由としては、やはりあのステイタスとスキルが原因だ。

「猛者」オッタルのレベルを容易くステイタスと実力、そして１０００年前でもわずか３０人程しかいなかった、究極とも言われた程の「王」系統のスキルを持っていると遊び人の神々にバレでもした暁には、ファミリア総出で追いかけ回された後に無理矢理入団されるのが落ちである。

若干話しが反れたが、兎に角通常のファミリアに入った所で１００％面倒な事になるに違い無い。

そう考えたウラノスが出した結論は信頼の置け、尚かつ眷属がいない神に頼む事。

焔自身は、本当にそんな都合の良い事があるのかと半信半疑だったが、自身の主神が居ると言うからには居るのだろう。

そして今に戻った訳なのだか、何もこの数日間焔も何もせずに過ごしていた訳では無い。

とりあえずは「千年修羅」を使わずに今のレベルを上げる事にした焔は、かなりの低くなった身体能力のコツを掴むためにダンジョンに潜り、そりなりの額の資金と体のコツを手に入れてある。

そしてその次の主神の都合が会ったと言うので、こうしてベンチに座って待っているという訳だ。

（しっかし遅いな）

かれこれ２～３０分待っているが、全く現れない。

おかげて小腹満たしに買ったじゃが丸君とやらを３つも食べてしまった。

いっそもう一つ買おうかと思ったその時、

「ホムラ　オボロヅキで合ってるか？」

不意に何者かに声を掛けられた。

その人物は、体中に線の様なタトゥーがが体中に走り、上半身は裸で頭に赤いターバンと言う非常に目立つ格好をしていた。
そして、焔の名前を知っていると言うことは、
「アンタが主神様が言ってた次の主神か？」
「そ。この世全ての悪、アンリマユっていうわ。まぁよろしくな」

「よし、これで改宗終わったぜ～」
「ああ」
今焔は、宿屋でウラノス・ファミリアからアンリマユ・ファミリアへの改宗を終えた。
そして今この時を持って、新たなファミリアか誕生した。
「さて、これからヨロシク頼むぜ英雄～」
「過度な期待はしないでくれよ？」
「キシシ。そんな冷たい事言わないで、Ｓランクのファミリア目指しちまおうぜ」

「ん？」
アンリマユ・ファミリア結成から４日、ギルドにも届けを出して正式に認められ、ダンジョン５階層をうろついていると、前方に金色の人影が倒れていた。
その周辺で遅いかかろうとしていたモンスターを蹴散らすと焔は、
「……精霊？」
その倒れている少女を怪訝な目で眺めていた。

# 介抱と誤解

「ただいま」
「おっ帰り～で、それ何？」
「ダンジョンで拾った」
「ふ～ん」
　現在、創立したてのアンリマユ・ファミリア。当然ホームなんて在るはずも無く、今は集合住宅の一部屋を借りることで代用していた。
　そしてそのホームの前で、焔は6歳程の少女を抱えて建っていた。事情を知らない者が見たら、どう考えても、誘拐現場と答えるだろう。
　最も焔がやってる事は、ただの人助けなのだが。
「それどうすんの？」
「とりあえず、起きたら何処のファミリアか聞く」
「りょ～か～い」

「あれ、どないしたん？リヴェリア」
「ああ・・・アイズがまた逃げ出した。魔石を採っている間に何処かに行っていたらしい」
「えっ、それってヤバない？」
「ああ、だから今からダンジョンに探しに行ってくる」
「お、オウ」

「そこの君、すまないが金髪の6歳ぐらいの少女を見なかったか？」
「えっ？……そーいやさっき銀髪の狐人にそんぐらいの子が運ばれてた様な」
「……そうか、感謝する」
「え、あ、言え別に、なんてこと無い、無いです、はい」

「・・・？」
「起きたか」
「!?」

少女がダンジョンでは無く、ベットの上で寝ている事に混乱していると、突然隣から自身に向かって声が掛けられた。少女が急いで隣に顔を向けると、其処には銀髪の狐人が椅子に座ってこちらを見ていた。

その狐人は呆れた様に見ながら、

「お前は何がしたいんだ？ダンジョンで気絶するまで戦うなんて」

「・・・」

「黙ってないで何か言えばどうだ？」

「・・・強くなりたいから」

「・・・そうか」

そこまで聞いて少し考える様に目を閉じると、

「で、お前はどうして強く成りたい」

「・・・お母さんとお父さんを探したいから」

「そうか。そう言えば、お前何処のファミリアに入ってるんだ？」

「ロキ・ファミリア」

「ロキ・ファミリア？って事は、お前アイズ・ヴァレンシュタインか」

「？知ってるの？」

「ああ。あくまで噂だけだがな」

最近ロキ・ファミリアに入団した「人形姫」については、焔の色々と噂を聞いている。

そんな調子で色々と話していると、

「焔～」

「何だ？」

「お客さん」

「客？俺にか？」

「うん、エルフのお客さん。なんか怒ってたけど、何かあったの？」

「いや、特に身に覚えもないが……」

そう言いながら立ち上がる焔は、気づいていなかった。

そのエルフの事を聞いてアイズが震えている事を、アンリマユが焔をニヤニヤと焔を見つめていた事を。

（あの野郎……）
　この時ばかりは、流石の焔も腹を括った何故なら。
「お前があの神の眷属か？」
「ああ、そうだ。名前は焔　朧月という」
「そうか。ではわたしも、私はリヴェリア・リヨス・アールヴ、さて、アイズを返してくれ」